# 令和５年度　いのちの授業　事例集（幼稚園こども園）【人間関係】

掲載数 8

| | 地区 | 学年 | 教科等 | テーマ | 内　容 | 参考事項（講師・教材等） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 中 | 年少 | 人間関係 | 赤ちゃんと触れ合う | 産休に入る前の教諭の大きなお腹を、幼児一人ひとりが触らせてもらった。出産後、教諭が赤ちゃんを連れて来園。子ども達は、生まれたばかりの赤ちゃんの足や手、ほっぺなどを優しく触ったり、「いないいないば～」とあやそうとする姿があった。途中、泣き出す赤ちゃんに、「お腹がすいちゃったんじゃない？」「うんちかな？」「おしっこかも？」「うるさかったんじゃない？」と赤ちゃんを心配する声も聞かれた。「僕も小さかった頃、ママにねんねんころりんを歌ってもらったんだよ」と、記憶に残っていることを伝えてきた。赤ちゃんと触れ合う中で、赤ちゃんを大切な存在として優しく大切にかかわろとする気持ちや、自分も大切に育てられてきたことを感じる機会となった。 | |
| 2 | 県西 | 幼複合 | 人間関係 | カメの世話を通して | ２匹のカメがいる。例年カメの世話は年長組の当番活動で、年長になると全員が関われる機会をもっていた。しかし、カメの飼育について保護者からの問い合わせ（衛生面などについて）があり、園内での話し合いが必要であった。その間、職員室で職員が世話をしていた。夏休み明け、登園を渋っている幼児や、クラスから職員室にクールダウンにくる幼児に「餌あげてくれる？」と誘うことで嬉しそうに行動する様子があった。その二人は学年は違うが名前が一緒で、そこで急に親近感もわき、毎日のカメの世話を二人の関係性も育みながらすすめることにした。係をもらったことでの使命感が「幼稚園に行こう」の気持ちを上昇させ、学年を超えた関係性を育み、そこから他の幼児へも世話の仕方を教える場面も見られるようになった。 | |
| 3 | 県西 | 年長 | 人間関係 | 誕生会をとおして自己肯定感を高める | 一年を通して、誕生会では保護者も参加してもらい、誕生児に向け一人ひとりから良いところ等『言葉』をプレゼントしている。「運動会のとき、リレーでアンカーを走った〇〇くんかっこ良かったよ！」「一緒に秘密ごっこができて嬉しかった！〇〇くんが相棒で良かったよ！」など“言われて嬉しい”“保護者も嬉しい”“生まれてきて、大きくなって本当に良かった”をあらためて確認をする機会となっている。<br>友だちと祝い合うことで喜びを分かち合い、“自分って大切に思われている”“自分の命を大切にしよう”と感じられる気持ちにつながった。 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 県西 | 年長 | 人間関係 | 令和６年能登半島地震を通して「被災者の気持ちに思いを寄せる」 | 元日に発災した能登半島地震について、冬休み明け登園してきた幼児が「すごく大きい地震があったんだよ！」「家が崩れちゃったんだよね」と教師に伝えに来た。震災関連の新聞記事を保育室に掲示しておくと、崩れた建物や津波で流された車、体育館に避難している方々の写真をじっと見ていた。数日後、学級全員で１枚1枚写真を見ながら「この方はどういう気持ちなんだろうね」「何て言っていると思う？」などと教師が声をかけ、思ったことを話す機会を作った。幼児たちは、崩れた家屋に手を合わせている方の写真を見て「『お願いだから生きていますように』って思っているんじゃない？」、青年がお年寄りを背負って瓦礫の中を歩く写真を見て「『もう大丈夫だよ』『今助けるよ』って言っているんじゃない？」と言っていた。幼児の言葉を付箋に書き、写真の横に貼っていった。その後も、「こんなことを思ったから（付箋に）書いて」と言いに来る幼児もいた。 | 写真付きの新聞記事を掲示しておき幼児の目に触れるようにしておいたことで、被害の様子が具体的になった。 |
| 5 | 県西 | 年中 | 人間関係 | 飼育当番活動を通しての育ち | いつも飼育当番をしている年長組がインフルエンザで学級閉鎖になり、野菜を持ってくる当番もなくなっていた。そのことに気付いた年中組の男児が、「ウサギのシロちゃんとモフちゃんがお腹をすかせているから、野菜もってきた！」と教師に告げた。「よく気付いてくれたね」と教師が話すと、「だってお当番の年長さんがいないから、ウサギさんがお腹が空いちゃうと思って……。早くご飯あげに行こう！」と教師を誘った。お腹を空かせて近寄ってくるウサギたちに「お腹空いちゃったね、今あげるから待っててね」と優しく声をかけながら、年中児は飼育を始めた。普段から生き物に対し園児たちは親しみを抱いていたが、命に係わる食の心配を自然とできる姿が見られた。<br>初めて行う掃除も、応援の友達と声を掛け合い、教師に聞きながら手際よく行えた。動物のために自分達ができることを考え、それが協力する姿につながっていった。また、命に直結する餌やりや水やり、きれいな環境のための掃除など、小さな動物でも命があること、それを守っていくことの責任感を、ウサギの飼育活動を通して子ども達は学んだ。<br>１月からは年中児が飼育当番を引き継ぐため、偶然めぐってきた当番活動ではあったが、これからは自分たちが命を守る活動をしていくんだという一人ひとりの姿勢を見守り、励ましていきたい。 | ・教師は子どもの姿を見守り、励まし、時に手助けをしながら関わる。<br>・家庭との連携を図り、当番の子は家庭からウサギの餌（野菜）を持ってくる。<br>・当番の表やバッチを用意し、次の当番への期待や意欲を高める。 |
| 6 | 県西 | 年少 | 人間関係 | 介護施設との交流 | 園の近くの介護施設で過ごす利用者さんが製作した季節の壁面をもらい、園に展示した。子どもたちには、施設のおじいちゃんおばあちゃんが作った作品であることを伝えた。２学期に芋掘りがあり、壁面のお礼に施設へ届けに行った。そこで初めて施設の方たちと会い、直接お礼を伝え、歌を披露したり一緒に手遊びをしたり交流をもった。交流を持ったことで、子どもたちには、お年寄りを大切に思いやる気持ち、利用者さんにとっても子どもたちとの触れ合いは、元気がもらえるとのことでよい交流となった。 | 特になし |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 7 | 県西 | 幼複合 | 人間関係 | あさがおトンネル | 本園は安全の為、乳児と幼児の園庭がわかれ、乳児園庭は柵で囲われた形となっている。日頃から幼児は乳児に興味をもっており「年下児の世話をしたい。」「一緒に遊びたい。」という気持ちを抱いていた。また乳児には「年上児が何をして遊んでいるのか知りたい」という思いが感じられたため、柵を超えた異年齢の関わりをもってほしいという保育教諭の願いから、園庭環境の見直しの一環として、地域の方の協力を得て、幼児園庭と乳児園庭をつなぐ「あさがおトンネル」を竹を使って作った。トンネルに這わせるアサガオは園児がプランターに種を撒き育てた。トンネルができたことで、幼児が乳児園庭を訪れることが増え、異年齢の関わりが広がっていった。幼児は乳児に遊びを教えたり手助けをしたりすることで、いたわりや思いやりの気持ち、態度が身についていった。また、乳児は幼児に憧れの気持ちをもち、新たな遊びや活動への期待、挑戦への意欲が育まれていった。 | ・地域の方にご協力いただきあさがおトンネルを作成する。<br>・材料：竹、シュロ縄、プランター、アサガオの種 |
| 8 | 県西 | 幼複合 | 人間関係 | 私達ができる事は何だろう？ | ３学期の始業式に冬休み中の出来事を子ども達と話す機会を設けた。休み中の楽しい経験と共に、元旦に起きた令和６年石川県能登半島地方地震や日航機の事故の話が話題となるのではないかと予想していた保育者であったが、子ども達からはその話題は上がらなかった。昨年度まではテレビで観たことを話題にする子どもの姿があったが、今年度は全く知らないという子どももいた。幼児なりに社会のことに関心を持ち、知り得た情報を周りの人に伝える経験も大切であると思い、保育者から能登半島地震について話した。そして、３学期が始められた事、家があり、食事が摂れる事など日常の当たり前の生活が幸せであることを伝え、今自分達ができる事は何かを考え、震災で亡くなれた方々のご冥福と、被災された方々に思いを寄せる機会になるように、子ども達に「お家の人と何ができるか考えてみてね。」と投げかけ、今後も子ども達と共に、“何ができるか”を考えていくようにした。 | |